ナサニエル・ホーソーンの「日曜日に家にいて」における理想的な安息日

川　下　　剛

要　旨

「日曜日に家にいて」においてホーソーンは，日曜日に信仰者たちが教会へ集まり，みなで信仰心を新たにするという伝統的な信仰のあり方に疑問を呈する。その一方で彼は，教会を擬人化し，孤独な静けさの中で信仰心を育む姿を理想的な信仰者として提示する。本論では，現在ホーソーン文学研究において注目を集めている「倫理」の観点から，どのような一日が理想的な安息日として提示されているのかを探求する。

キーワード：安息日，信仰，孤独，倫理

はじめに

ナサニエル・ホーソーンの「日曜日に家にいて」(1837) は，ある夏の夜明けから夕方までの安息日の一日を描いた短編である。一人称の語り手である私は，朝，目を覚まし，カーテンをめくると，尖塔からゆっくりと光に身を包む教会の静謐な美しさを眺める。教会の真向いに住む彼は，朝の太陽の神聖な光が，安息日を特別な日にするのだと空想する。そして彼は思う。「私の姿はないけれども，私の内なる自分はいつも教会に通っている。一方で，多くの人は肉体がいつもの席に参列しているけれども，魂を家に置き忘れている」(Hawthorne, “Sunday” 21) と。この指摘は 19 世紀アメリカ東北部における形骸化した安息日のあり方に疑問を呈し，読者の倫理を問う問題だといえよう。

ローレンス・ビュエルは 1999 年の『PMLA』の序文において，もともと伝統的な文学研究では，文学が倫理の反映として捉えられていたと指摘し，現代思想の影響を受けた 20 世紀後半の構造主義やポスト構造主義の中でも，最終的には倫理という問題が立ち返ってきたと述べている (8–11)。この指摘以降，文学作品における倫理という視点は注目を集めるが，ホーソーン文学研究では，2023 年に出版された論文集が『ロマンスの倫理と語り』と題され，さまざまな作品が倫理という観点から論じられているように，倫理という視点はなお，注目すべき視座だといえよう。

「日曜日に家にいて」が上梓された 19 世紀アメリカにおいて，「倫理（エシクス）」とはどのような意味で用いられていたのだろうか。1828 年のノア・ウェブスターの英語辞書によれば，倫理とは，「人々に自分たちの義務とその理由を教える道徳哲学」であり，「社会における人々の行動やマナーを規制するための規則の体系」であるという。そして「道徳（モラル）」とは，

「行動が善か悪か，美徳か悪徳かに用いられ，その性質が決定される基準として神の法がかかわる」と定義されている。城戸光世は「ホーソーンの数少ない『倫理』への言及例でも,『モラル』は個々の人物の内面性や徳性を表すものである一方,『倫理』は，人の道徳性に深く関係はしているものの，個別性よりも普遍的で抽象度の高い学問体系を指している」(13) と述べている。つまり神の法に基づいて，個々人の思想や行いの善悪を判断するのが道徳であるならば，倫理とは，ある社会的空間において人はどう振る舞うべきかという，より抽象的で普遍的な問題を考察する学問として「議論をする対象」(城戸 14) なのだといえよう。

本論ではまず，物語の舞台となる 19 世紀前半，マサチューセッツ州の人々はどのように安息日を過ごしていたのかを概観する。そして次に，倫理の観点からこの物語を読み，理想的な信仰者を明らかにすることで，この物語に提示される理想的な安息日を検討する。

1．ホーソーンの安息日

安息日とはどのような日なのだろうか。本章ではまず，旧約聖書と 19 世紀のマサチューセッツ州の法律を確認する。そして次に，作家たるホーソーン自身はどのような安息日を過ごしていたのか，彼の創作日誌『アメリカン・ノートブックス』のエントリーを検証し，当時の社会状況を概観する。

ホーソーンが生まれ育った 19 世紀アメリカ，マサチューセッツ州は，もともと信仰の自由を求めてイギリスからアメリカへと移住してきたピューリタンたちが切り開いた植民地を基盤にしている。1630 年，植民地初代総督となるジョン・ウィンスロップは，新大陸へ向かうアーベラ号の船上で,「いかなる人間であれ，他の人間よりも名誉や富を与えられたのは，特別な個人として配慮されたためではなく，創造主の栄光とその被造物である人間の公益のためである」(Miller 80) と，その理念を掲げている。ピューリタンたちは個人の幸福よりも，神の被造物として，神の下で人類全体が繁栄することを希求していたのである。さらにウィンスロップは，マサチューセッツ湾岸植民地の建設が神との契約に基づいた行為であると定め，この植民地はあらゆる人々の目が集まる「丘の上の町」(83) になるだろうと宣言する。つまりアメリカへと移住してきた初代ピューリタンたちは，聖書の教えに基づき，キリスト教徒にとって模範となる町を作ろうとしたのである。

当然，この植民地では社会の規律として安息日が順守されるが，旧約聖書ではどのように規定されているのだろうか。「出エジプト記」に書かれた一節を確認する。

> 安息日を覚え，その日を神聖な一日にしなさい。6 日間働き，あなたの仕事をすべてしなさい。しかし 7 日目は，あなたの神，主の安息日である。だからその日は，いかなる仕事もしてはならない。あなたも，息子も，娘も，男女の奴隷も，家畜も，あなたの門の内側

にいる人々も同じである。というのも，6 日の間，主は天と地と海と，そこにあるすべてのものを造り，7 日目に休んだ。それゆえ，主は安息日を祝福し，その一日を神聖なものとしたのである。（*Holy Bible*, Exod. 20.8–11）

17 世紀にウィンスロップが宣言した「丘の上の町」の理念は，イギリスからの独立後も継承される。そして 18 世紀が終わるころ，この一節は州法として成立する。ハーモン・キングズベリーによれば，1791 年から 96 年の間，マサチューセッツ州において，安息日に関する次の条項が通過する。

第 1 条　だれも主の日に，店や倉庫，救貧院を開いたり，いかなる種類の労働，商売，仕事をしてはならない。（必要な慈善事業を除く）
第 2 条　だれもその日に旅行をしてはならない。（必要，慈善を除く）（Kingsbury 15）

この州法は，ホーソーンの生まれ育った 19 世紀前半にも有効だった。それゆえ彼の短編「日曜日に家にいて」では，安息日に人々が仕事を休み，教会へと足を運ぶ姿が描かれる。そこで彼らはオルガンの伴奏で讃美歌を歌い，牧師の説教を聞く。彼らは聖書を学び，キリスト教徒として信仰心を新にするのである。つまりこの物語では，そのような日曜日が模範的な安息日の過ごし方として読者に提示されているのである。

しかしフィクションと現実は異なる。若き日のホーソーンは，安息日をあまり気にかけていない。1821 年，ホーソーンが 17 歳の時，彼はマサチューセッツ州からメイン州のボードン大学へと入学する。それからほどなくして，彼は姉のエリザベスに次のような手紙を送る。

大学の規則はそれほど厳しくないし，半分も守られていない。それらのうち，特に気に食わないのは，例えば，毎朝日の出の時間に起きて，礼拝に出席しなければならないことだ。学生たちは，そのような規則は週に 2 回，破ることを習慣にしている。最悪なのは，毎週日曜日に集会に行って，地獄の責め苦の中，学長や他の人から熱烈なカルヴァン派の説教を聞かなければならないことだ。（Hawthorne, *Letters* 159）

エリザベス宛ての手紙ではこの後，学長への悪口が続く。ホーソーンはボードン大学でのキャンパスライフに概ね満足していたようであるが，安息日の礼拝には不満が溜まっていたようである。

このように安息日のあり方に疑問を持つ姿勢は，ホーソーンが 30 歳を過ぎても変わらなかった。1835 年 6 月 22 日付の『アメリカン・ノートブックス』のエントリーで彼は，マサチューセッツ州ボストンで見た安息日の風景を詳細に記している（Hawthorne, *American*

Notebooks 6–8)。これは当時の社会状況を知る貴重な資料なので，少し詳しく見ておきたい。

肌寒い6月の午後，ホーソーンはプロクター氏とともに，ボストン西方にあるマーベリック・ハウスというおしゃれなホテルへ馬車で向かい，バーに1時間ほど滞在する。バーの主人は，真っ白なリネンの服を着こなし，宮内長官のような丁寧な対応をする。店にはボストンから来た多くの客が群がり，バーのそばに立って，お酒が準備される様子を眺めたり，窓際の席で顔を赤らめ，煙草をふかしたりしている。このホテルの向かいにはメカニクスというホテルがあるが，こちらも同じような状況である。マーベリック・ハウスのほとんどの客は，洒落た上品な恰好をした若い男性であり，日曜日の紳士のように見えるが，靴の底が擦り減っている。また，かわいいとはいえないが女性たちもいる。彼女たちの上品ぶった様子は若い男性たちのそれによく似ている。男女とも特に何かを楽しむわけでもなく，ゆっくり時を過ごしている。ホーソーンはこのように当時の風景をノートに記録し,「この観察は，大きな町の近郊に住む未婚の若い中流階級の大半が，どのように安息日を過ごすのかを描くときに役立つかもしれない」(7) と記している。

また，1時間ほどマーベリック・ハウスに滞在したホーソーンとプロクター氏は，次にボストンの中心部へと向かい，酒場へと入るが，先ほどと同じような光景が見られる。

> 船でボストンに入ると，われわれは町の宿屋へと向かった。そこの酒場は，ある平和な安息日の風景を示していた。客たちは，安息日を祝うために清潔なリネンの服や上品なものを着て，椅子に座ってのんびり時を過ごしたり，半分眠ったり，煙草をふかしたりしていた。(7)

この日の最後に，2人は丘へと上り，ボストンの町を見渡す。その後，彼らは丘を下り，チャールズタウンを抜けて家路につくが，その時の光景や感慨を次のよう述べている。

> たくさんの駅馬車が道を走っていた。中に外に人を乗せて。2人乗りや4人乗りの馬車には，御者や従僕が乗っていた。われわれは安息日破りの集団だ！ (8)

先に見たように，聖書によると安息日は神聖な日として過ごさなければならない。しかもこの日記を記した1835年はまだ，安息日の順守を求める州法が有効であった。にもかかわらず，若者たちは昼間からバーで酒を飲み，煙草をふかし，怠惰な時間を過ごしている。クリストファー・グレン・ディラーは，ホーソーンの仲間のボストニアンたちは，この州法をあまり気にかけていなかったことは明らかだろうと指摘している (Diller 2)。このように，19世紀アメリカ東北部では，宗教的倫理として安息日が定められていたが，人々がみな，その規範におとなしく従っていたわけではないのである。

パトリシア・ダンラヴィ・ヴァレンティは,『アメリカン・ノートブックス』はホーソーンの妻ソファイアと編集者ジームズ・T・フィールズが手を加えたものだと指摘する（Valenti 115)。この日誌を出版するにあたり，ソファイアは亡くなった夫が恥ずかしい思いをしないよう，文法やスペルの間違いを校正し，私的な内面に関わる部分はかなり削除していたのである。ホーソーンの初期の日誌はまず 1866 年,『アトランティック・マンスリー』に掲載される。そしてその後，フィールズがソファイアに対し，さらに広範囲の日誌を公開するように勧め，1868 年,『ナサニエル・ホーソーンのアメリカン・ノートブックスからの一節』が出版される。これらの 2 冊を比較すると，先に見たマーベリック・ハウスでの描写から大きく 2 カ所が削除されていることが分かる。この削除された 2 カ所は，ホーソーンのより私的な内面を明らかにする記述なのだといえよう。

> しかしながら，女の子たちがこの場所を歩いているときに，風が彼女たちのシルエットを露わにするのを見るのは楽しかった。ペチコートはほとんど見えなく薄いもので，しかも短かった。ストッキングを履いた足はかなりの部分が見えていたし，両足の全体の様子も分かった。薄いガウンが，もやのように足の辺りでひらひらしていた。腰のベルトは，その下のドレスの自由さとゆるさと対照をなし，すばらしい効果を発揮していた。（Hawthorne, *Miscellaneous* 127）

> 私の良心が自分も同じようなことをしているのだと咎めた。もし家にいたら，私は読書をしていただけなのだろうけど。（127）

前者の引用に関しては，結婚前の日誌とはいえ，夫が安息日にこのように浮ついた記録を残していたとは読者に公表しがたいところだといえよう。それが夫の死後であれば，なおさらである。しかし注目したいのは，後者の引用である。ホーソーンは 1835 年 6 月，安息日に友人と馬車で遠出をして，酒場をはしごした記録を残しているが，彼はその行為に対して良心が「咎めた」のだと告白している。『アメリカン・ノートブックス』では,「われわれは安息日破りの集団だ」と軽く記されているが，実際のところ，ホーソーンは安息日を順守しない自らの振る舞いに深く罪悪感を覚えていたのではないだろうか。安息日を「神聖な一日にしなさい」という聖書の教えに反する行いは，道徳的に間違いであると。

このような当時の状況を踏まえると，1837 年に発表された「日曜日に家にいて」という短編は，安息日が守られなくなった風潮に対し，また自らへの戒めも込めて，人々のまなざしを安息日の過ごし方へと向けるために書かれたのだといえよう。そしてこの物語においてホーソーンは，この問題を個々人の善悪を判断する道徳的問題として提起するだけでなく，人は安息日をいかに過ごすかという倫理的な問題として抽象化し，普遍化することで，理想的な安息日を

読者に提示するのである。

2. 理想的な信仰者，教会の価値

「日曜日に家にいて」の結末で語り手は，大きな教会を町の中心に建てる必要があるのか，と問いを投げかけ，自らそれに答える。つまり語り手の自問自答で物語が終わるのである。ウェブスターが定義したように，当時，道徳とは人々の行いの善悪を個別的に判断する神の法に関わるものであった一方，倫理とは普遍的，抽象的な問題を議論すべき学問の体系であった。この定義を踏まえれば，先の語り手の問いは，教会という存在の善悪を問う道徳的問題ではなく，神の摂理や信仰に関わる普遍的な倫理的問題を提起しているのだといえよう。本章ではまず，安息日における人々の行いの道徳的問題を検討し，次に理想的な信仰者や教会の価値という倫理的問題を考察する。

物語冒頭の場面では，安息日の過ごし方に対する語り手の態度が明らかにされている。語り手は，夜明け前に目を覚ますと，朝の太陽の光が教会の尖塔から足元の階段まで，ゆっくりと輝かせていく様子を眺める。彼は尖塔の影が円を描いて訪ねてくる自分の部屋が，安息日のたびに神聖な場所へと聖別されるかのように感じ，次のように思う。

> 疑念が私の周りを飛び回るかもしれないし，邪悪な翼を閉じて，私に止まろうとするかもしれない。しかし安息日に地上が清められ，天の光が神聖さを保持していると想像する限り —— あの祝福された日光が私の内にある限り —— 私の魂は決して信仰への本能を失うことはない。もし道に迷ったとしても，また再び戻ってくるだろう。(Hawthorne, “Sunday” 21)

語り手にとって，神への信仰とは常に安定して保てるものではなく，時には疑念や不安が生じ，道を見失う可能性もある。しかし週に１度，安息日に天の光が地上を清め，自らの内側にもその光が保たれているのだと想像する限り，「私の魂は決して信仰への本能を失うことはない」と彼はいう。つまり安息日とは，平日の仕事や生活に追われ，時に見失いそうになる神への信仰心を再び清め，新たにする日なのだといえよう。この語り手の台詞で注目したいのは想像力である。天の光が地上を清め，安息日を神聖な日としているのは，語り手の想像力である。つまり語り手は想像力を媒介として，天の光が彼の心身を浄化するのだと感じ，信仰心を新たにすることができるのである。従って，安息日を神聖な一日にできるかどうかは，信仰者が天の神聖さを想像するという積極的な意思にかかっているのだといえよう。

そして語り手は，自分の篤い信仰心とは対照的に，多くの人はそのような心を欠いていると批判する。例えば，若い女性たちである。彼女たちの大半は落ち着いた色の服を着て教会での

礼拝に参加しているが，中には全身，赤や黄色といった目立つ服を着た女性もいる。語り手は，彼女たちが「あたかも祝福された天使と競い合い，男性たちの思考を天から遠ざけようとしているのだ」(22) といい，自らも彼女たちの魅力にとらわれていることを告白する。そして午後の礼拝が終わると，若い女性たちは「お気に入りの独身男性と夕方の散歩の約束をして，ひらひらと飛んでいく」(25)。彼女たちにとって，教会は若い男性との出会いの場になっているが，それは男性側でも同じだといえよう。また別の参列者に注目すると，礼拝の後，目をこすりながら教会から出てくる人たちがいる。語り手は，彼らは「熱烈な信仰心による，ある種の聖なる昏睡状態」(25) に陥っていたのだという。つまり礼拝の最中，彼らは居眠りをしていたのである。『アメリカン・ノートブックス』にも記載があったように，1830 年代のボストン周辺では，安息日を順守させるべく州法が施行されていたものの，心から天の神聖さを想像し，信仰心を新たにしようとする人々が少なくなっていた。個々人の道徳心を欠いた行為が，この場面において批判の対象になっているのである。

このような状況を自室のカーテンの後ろから見ていた語り手は，次のような倫理的問題を提起し，安息日をいかに過ごすのか，読者に内省を促す。

> 私の姿はないけれども，私の内なる自分はいつも教会に通っている。一方で，多くの人は，肉体がいつもの席に参列しているけれども，魂を家に置き忘れている。しかし私はそこにいる。友人の寺男よりも前に。(21)

語り手は，信仰心を欠いた状態で教会での礼拝にみなでいつものように参列するよりも，自宅でひとり魂を清め，天の神聖さを想像する方が，よりよい安息日を過ごせるのではないかと主張する。つまり彼は，形式を重んじるのではなく，神と向き合おうとする意志を重んじているのである。語り手にとって，安息日という一日は，孤独の中，想像力を媒介として，神への信仰心を涵養する大切な時間なのだといえよう。これはホーソーン自身の安息日の過ごし方にも繋がる。次の引用は，1842 年 9 月 4 日付の『アメリカン・ノートブックス』の一節である。

> 私の妻は午前中，教会に行った。しかし彼女の夫はそうではなかった。彼は安息日が好きだけど，それに従う決まったやり方がない。(Hawthorne, *American Notebooks* 358)

ホーソーンは安息日を好んでいたが，その形式や習慣にはとらわれていない。それゆえ彼は，型にはまった安息日の過ごし方に疑問を呈し,「日曜日に家にいて」で読者のまなざしを安息日のあり方に向けようとしたのである。そして先の章で指摘したように，かつてウィンスロップたち移民団は，植民地の建設が神との契約に基づいた行為であり，この植民地はあらゆる人々の目が集まる「丘の上の町」になることを社会の共通理解として認識していたことを踏まえれ

ば，ホーソーンは「私の姿はないけれども，私の内なる自分はいつも教会に通っている」という一節において，かつて全体主義であった信仰の形式は19世紀に至り，個人主義的な内省へと移行すべきではないか，という宗教倫理を問う問題を提起していることが分かる。それは裏を返せば，信仰者をすべて教会の統制下におこうとする全体主義の限界を暗に指摘したのだともいえよう。つまりホーソーンは，いかに安息日を過ごすべきかという問題を提起し，その答えを提示することによって，信仰に対する読者の意識改革を促そうとしていたのである。

ただし，この物語では，語り手自身が理想的な信仰者として描かれているわけではない。確かに彼は安息日の朝，だれよりも先に教会へと心を向かわせ，日光で清められた自室で神と向き合い，神聖な一日を過ごそうとする。だが彼はカーテンの穴から教会に出入りする人々を覗き見ながら，参列者の心を詮索し，彼らの服装や行為を批判する。そのような安息日を過ごす人物が，理想的な信仰者とはいえない。彼は安息日の一観察者である。

では，この物語における理想的な信仰者とはだれか。再び物語の冒頭に注目してみたい。

> 教会の近くに住んでいると，人はすぐにその建物に愛着を抱くようになる。われわれは自然と建物を擬人化し，そのどっしりとした壁やほの暗い空虚さが，静かで，瞑想的で，少し憂いのある魂に満ちているのだと想像する。(Hawthorne, “Sunday” 19)

物語の冒頭で語り手は，教会という建物があたかも人であるかのように捉える。安息日の朝，教会は尖塔から日光が織り成す「特別なローブ」(19) を身にまとい，輝く。この建物は町の人々の関心事に気を配る「広い心と洞察力をもった巨人」(19) でもある。そしてこの建物は，人々の関心事にかかわりをもっているにもかかわらず，平日の間，その荘厳な高みの周囲には，静かな孤独が覆われる。この孤独の中，人のいない教会には，時も存在しないのだと語り手はいう。

> 時 —— 人が存在しない時とは，永遠そのものではないだろうか？　そしてこう考えてもいいのではないか。平日の間，教会の中では永遠に関するあらゆる思索や感情が集められ，聖なる日が再び来ると，それを解き放つのだと。(20)

語り手は，週の安息日を除く日，教会の内部では人がいない静寂の中で,「永遠に関するあらゆる思索や感情」が集められ，それは安息日に解放されるのだという。そうであれば，平日に集められる「思索や感情」とは，神の摂理に関わるものを指すのだといえよう。つまり擬人化された教会という建物は，孤独の中で思索を練り，静けさの中で信仰心を育んでいるのである。語り手は，このような教会の孤独を「道徳的な孤独」(20) という。

この物語の結末は，次のような教会の価値を問う倫理的な問答で終わる。

町の中心に人のいない場所を作り，週の７日目のわずか数時間，人を集めるために，この大きな建物を建てる価値はあったのだろうか。ああ，しかし教会は信仰の象徴なのだ。最初の木が倒されたその日に聖別された土地が，永遠に神聖な場所でありますように。平日の世界の煩いと虚栄の中，孤独で平穏な場所でありますように！　この静かな壁の内側にさえ道徳があり，信仰がある。最後に，教会の尖塔がこれまでのように天を指し，安息日の朝の聖なる太陽の光で飾られますように！（26）

物語の終わりに語り手は,「教会は信仰の象徴なのだ」と述べる。彼にとっての理想的な信仰者とは，教会という建物そのものなのだといえよう。教会は「平日の世界の煩いと虚栄の」中でさえ，ひとり静かに思索を練り，平日の間に集めた「思索や感情」を安息日に解放する。教会の尖塔は，天の神聖さを想像する意思，つまり天に向かう信仰心を象徴しているのである。語り手は，このような教会の姿を理想的な信仰者だとしたのではないだろうか。そして彼は，他者の心を詮索したり，若い男女の交友を覗き見したりしながらも，平日の教会の姿を理想として，ひとり孤独に神と向き合い，思索する一日を理想の安息日として読者に提示したのではないか。レイチェル・グリフィスはこの物語を次のようにまとめている。

「日曜日に家にいて」は，キリスト教の信仰について，反抗的で正統派ではない信念や実践を伝えているけれども，それにもかかわらず，この物語は安息日を保持する文化的習慣に対する真価を伝え，想像力を通して，個人の精神的，知的生活を育む習慣の役割を認めている。（Griffis 89）

おわりに

理想的な安息日とはどのような一日なのだろうか。「日曜日に家にいて」が描かれた1830年代のアメリカ，マサチューセッツ州では，キリスト教への信仰が薄れ，一部の人々にとって安息日は形骸化した習慣となっていた。そのような時代の風潮を自身の内にも見出したホーソーンは，日曜日に人々を教会に集めて信仰心を深めようとする宗教的全体主義の限界をこの物語で描く。その一方でホーソーンは，ひとり思索を練り，静けさの中で信仰心を育む平日の孤高な教会を理想的な信仰者として提示し，信仰の個人主義を標榜する。それゆえホーソーンにとっての理想的な安息日とは，教会で行われる従来の伝統的な一日ではなく，ひとり静かに神と向き合い，信仰心を涵養する一日なのだといえよう。さらに安息日の朝には，たとえ平日の間に信仰心のゆらぎがあったとしても，天の神聖な光が地上を清め，その光が自らの中にもあるのだと想像する意思があれば，信仰心を新たにできることを付言する。そしてこの物語の最後にホーソーンは，町の中心に大きな教会を建てる必要があるのかという宗教倫理に関わる問

題を提起するが，それは読者だけでなく自らに対しても，社会の中心に「信仰の象徴」が置かれている意味を考え，日曜日ごとにひとり信仰心を涵養する時間を作るよう望んだからではないだろうか。

注

＊ 本稿は 2022 年 5 月 20 日に開催された日本ナサニエル・ホーソーン協会第 40 回全国大会ワークショップで行った口頭発表の原稿に加筆・修正を加えたものである。

引用文献

Buell, Lawrence. “Introduction: In Pursuit of Ethics.” Special Topic: Ethics and Literary Study, *PMLA*, vol. 114, no. 1, January 1999, pp. 7–19. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/463423.

Diller, Christopher Glen. “So Cruel: Taking Hawthorne’s ‘Sunday at Home’ Seriously.” *Nathaniel Hawthorne Review*. vol. 36, no. 2, 2010, pp. 1–27.

Griffis, Rachel B. “Critiquing Society from a Distance: Solitude in Hawthorne’s and Thoreau’s Sabbath Writings.” *Nathaniel Hawthorne Review*. vol. 47, no. 1, 2021, pp. 84–100.

Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks*. vol. 8 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ohio State UP, 1972.

——. *The Letters 1813–1843*. vol. 15 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ohio State UP, 1984.

——. *Miscellaneous Prose and Verse*. vol. 23 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ohio State UP, 1994.

——. “Sunday at Home.” *Twice-told Tales*. vol. 9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ohio State UP, 1974, pp. 19–26.

Holy Bible. Authorized King James Version, Oxford UP, 1952.

Kingsbury, Harmon. *The Sabbath: A Brief History of Laws, Petitions, Remonstrances and Reports, with Facts and Arguments, Relating to the Cristian Sabbath*. Robert Carter, 1840.

Miller, Perry, editor. *The American Puritans: Their Prose and Poetry*. Columbia UP, 1956.

Valenti, Patricia Dunlavy. “Sophia Peabody Hawthorne’s *American Notebooks*.” *Studies in the American Renaissance*. 1996, pp. 115–185. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/30227685.

城戸光世「〈エシカル・ルネサンス〉期のホーソーン文学」『ロマンスの倫理と語り ―― いまホーソーンを読む理由』開文社出版，2023 年，3–21。

An Ideal Sabbath in Nathaniel Hawthorne's "Sunday at Home"

Takeshi KAWASHITA

Abstract

In "Sunday at Home," Hawthorne casts doubt on the traditional way of worship where believers gather at church on Sundays to renew their faith. Simultaneously, Hawthorne personifies the church to present that the nurturing of faith in solitude and tranquility makes for an ideal believer. This paper aims to explore what kind of day constitutes an ideal Sabbath from a perspective of "ethics," a term which often draws attention in Hawthorne literary studies.

Keywords: Sabbath, faith, solitude, ethics